

南のひと 21

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。

玉城大地くんとは、約1年ほど前に石垣島の撮影現場で出会った。人当たりの良い好青年で、悩みなど無いお坊ちゃんなのだろうという印象を受けた。その後、SNSで繋がっていたことがきっかけで、大地くんが高校卒業後に海外で勉強を始めたことを知り、日本の大学ではなく、なぜ海外へ向かったのかを知りたくて、カナダから一時帰国している大地くんにつながしてみた。

大地くんは、私が抱いていたイメージからは、ほど遠い複雑な想いを抱えながら日々を過ごしてきた青年だった。

「家族が八重山では少数派であるキリスト教徒だったこと、5人姉弟の上2人の姉が精神疾患を患っていたこと、一番上の姉とは18歳も離れていたことで、親の年齢が同級生の親達よりずっと上だったことなどで、幼少期のころから自分は周りから浮いている気がしていた。とにかく“ふつう”になりたいと思いつづけていた。周りとは違う事がとてもこわかった」と話してくれた。

胸の内のモヤモヤと向き合うには、まず自分を知ることだと考えた大地くんは、海外に出て自分を確かめてみたいと思うようになったという。高校卒業後は英語を学ぶためフィリピンへ3ヶ月間、その後バンクーバーのカレッジを目指すためカナダへ留学した。

カナダでは、人は皆それぞれ違う価値観を持って暮らしていることが当たり前で、その違いを尊重し合うことも当たり前の社会だ。友人達と話していても自分は1人の人として尊重される。そんな中で、自分をもっと大切にしようと思えるようになったと語ってくれた。

「卒業後は何がしたいですか？」という質問に、「朝から晩まで働き続けて自分が好きな場所で勉強できるようにサポートしてくれている両親を、旅行に連れて行ってあげたい」と素直な口調で答えた。

別れ際に、“ふつう”…“ふつう”っていったい何が“ふつう”なんだろうねえ？」と言いながら、アハハハ！と笑った大地くんの姿はとてもたのしく、その吹っ切れた笑いは、私を爽快な気分にくれた。



水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。